

# ほっと すぺ〜す

No.149  
2023・3



全国手をつなぐ事業所協議会ニュース

今号では

◆全国手をつなぐ事業所協議会 ミニセミナーの動画を配信しています



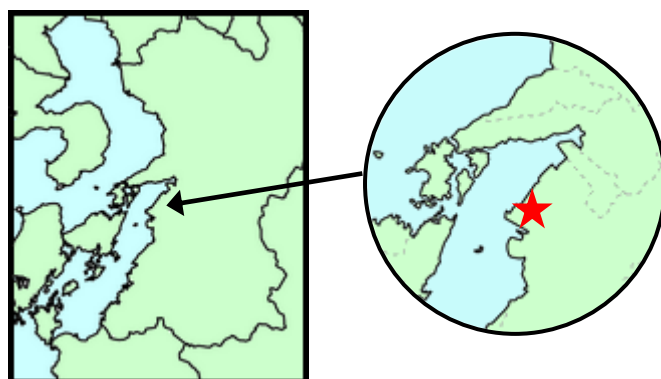
【まんさく園の皆さん】

全国の事業所から

(社福) 麦の会

まんさく園

《熊本県 八代市》



# ほっとすぺ～す

No.149 2023年3月発行

## 今号の目次

3



### にこっと、HOT!

プロ野球のキャンプを見に行きました  
(特定非営利活動法人 おきなわ自立支援センター)

5



### On The Frontline ～ 前線に立つ ～

マイノリティが尊重される社会が社会福祉に  
ほかならない!

社会福祉法人 朔風  
朔風支援センターささえーる（北海道 札幌市）  
管理者 若松 修一 さん

12



### 全国の事業所から

まんさく園（熊本県 八代市）

16



編集後記

### おらせ

全国手をつなぐ事業所協議会 ミニセミナーの動画を  
配信しています

先月号に掲載しました、全国手をつなぐ事業所協議会ミニセミナー「相談支援事業の現状と地域生活支援拠点について」を、2月22日に開催しました。

研修動画（139分）については、令和5年3月31日まで見ることが出来ます。【URL】<https://youtu.be/I-1fvgUJ7gs>



# にこっと、HOT!

～ちょっと、イイ話～

「にこっと、HOT!」障害福祉の現場ではつつい厳しい話も多くなってしまいがちです。しかしよくよく見ると毎日の現場では笑い声が絶えません。ついニヤニヤしてしまったり、ほろっとすることが日常の中に隠れています。

第3回目は沖縄県沖縄市からです。

## プロ野球のキャンプを見に行きました

特定非営利活動法人 おきなわ自立支援センター  
(沖縄県 沖縄市)

「冬来りなば春遠からじ」という言葉は、英国の詩人であるシェリーが「西風に寄せる歌」という長詩に書いた言葉で、「つらい時期を耐え抜けば、幸せな時期は必ず来る」というたとえとも言われています。

私たちの住む沖縄は、秋、冬、春が瞬時に通り過ぎ、辛い冬より暖かい夏を長く過ごすために、「耐え偲ぶ」ことより「なんくるないさ(何とかなるよ)」との意識が生まれたのかもしれませんがね。(笑)



【沖縄の桜「琉球寒緋桜」】

1月の短い桜の季節の後、2月の声を聴くと同時に聞こえてくるのは「球春の音」です。

日本各地の寒さの厳しい時期を避け、南国沖縄を目指してくるプロ野球（今年は9球団でした）の訪れと共に始まる沖縄キャンプが、私たちに春を告げてくれます。

沖縄県内の障がい事業所の利用者にとって、普段の生活にはなじみの薄い華やかなプロ野球選手の活動を目にすることは、年に一度の最高の楽しみであります。

今年は事業所の利用者の皆さんと、地元のコザしんきんスタジアム（旧沖縄市営球場）に、広島カープのキャンプを見に行きました。

広島カープは、例年宮崎で1次キャンプを行い、その後に沖縄で2次キャンプを行っています。1982年（昭和57年）から沖縄市で実施していただいております、2014年（平成26年）からは建て替えられたコザしんきんスタジアムで実施しており、今年は2月17日から28日までのスケジュールでした。

今回、訪問した日は2月22日で練習だけの日でしたが、日によっては練習試合やオープン戦も行われ、全国から多数の広島ファンや他球団のファンも訪れるため、沖縄市も力を入れて盛り上げています。

事業所で練習見学に行くことが決まってから、利用者の皆さんはインターネットで選手

名簿を検索して準備万端で行きました。球場ではプリントアウトしてきた選手名簿を頼りに、背番号と名前を照らし合わせ、有名選手を探す利用者たちの瞳は、あたかも大好きなアイドルとの遭遇のように喜びに溢れ、満面の笑みは明日への活力の素となるに違いありません。



【応援幕の前で集合写真を撮りました】



【この日の最高気温は22度でした】

ここまで広島カープを一押しでこの原稿を書いています。実は根っからの巨人ファンであることは利用者の皆さんに内緒です。

（特定非営利活動法人 おきなわ自立支援センター 理事長 田中 寛）

# On the frontline

～前線に立つ～

「On the frontline ー前線に立つー」では、障害福祉を前線で支える「人」にスポットライトを当てます。全国各地で障害福祉に携わり奮闘されている皆さんにお話を伺い、その活動を広く皆さんに伝えていく企画です。今回で13回目となります。

今回は北の大地、北海道札幌市にあります社会福祉法人 朔風 朔風支援センターささえーる(グループホームそら・就労継続支援B型事業所ひいらぎ)の管理者をされている若松修一さんです。

朔風とは「北風」を意味し、1990年(平成2年)に札幌市で開催された全日本手をつなぐ育成会(当時)の全国大会のスローガン「福祉の風は北から」に着想を得ているとのこと。そして、若松さんがいらっしゃる「そら」は高齢利用者の方に特化した事業所で現利用者19名、同建物内にある「ひいらぎ」は現員22名とのこと。「そら」は医療的ケアが必要な方も2名利用しているとのこと。若松さんは1969年(昭和44年)生まれの53歳。既に障害福祉事業を引っ張っている方のお一人です。

令和5年1月16日にお話を聞きました。

## 第13回

## マイノリティが尊重される社会が社会福祉に ほかならない!



社会福祉法人 朔風  
朔風支援センターささえーる  
管理者 若松 修一 さん

【松崎】 それでは、まず若松さんのプロフィール、障害福祉の世界に足を踏み入れたきっかけを教えてください。

【岩松】 はい。私は北海道滝川市の生まれで、高校までそこで暮らしていました。滝川市は雪深い町で、札幌から北に90kmくらい離れた人口4万人くらいの小さな町です。家族は妻と子2人の4人家族です。大学で札幌の大学へ進学するになり、それからは札幌で暮らしています。

大学時代は有意義な大学生活ではなく、目標も無くぶらぶらしてしまし

た。そんなことをしていてもしょうがないなと大学を中退し、取り敢えずアルバイトを始めようと、札幌市にある学童保育の職員（アルバイト）として採用されました。

そこで、身体障害のお子さん（軽度の知的もあり）と出会い、初めて福祉というものを意識する機会が出来ました。直ぐに書店に行き初めて福祉の本を読み、なんとなくではありますが札幌市内の福祉施設を見学してみようと思い、複数見学しました。その見学した時に、こういうところで働いてみたいと感じ、この仕事に就くことになりました。当時は、資格もなく学歴もないため面接すら行ってもらえないことが多く、就職するのに苦労した記憶があります。



【朔風支援センターささえーるの外観】

【松崎】 若松さんに道に悩まれた青春時代があったんですね。大学の時に札幌にということでしたが、東京へという思いはなかったのですか？

【岩松】 滝川市はその頃人口4万人くらいの都市で、大きくはなかったです。大学は東京の大学も受けましたが、札幌の大学に受かったので、そちらに。受かっていたら東京ということもありましたね。

身近には障害のある方もいませんでした。学校に支援学級もありましたが、渡り廊下の離れたところにあつたので、分からなかったのもあり、関心を持つ機会がなかったですね。

【松崎】 53歳と言えば経験も積んで働き盛りですね。ご家族4人とのことですが、ここまでいかがでしたか。

【岩松】 はい。子どもはもう成人しており、家から仕事に通っています。上が息子で下が娘です。

自分としては30過ぎてから仕事の面白味を感じるようになりました。50代前半なので、まだ若いぞと自分自身では思っていました。最近コ

コロナの関係で施設に泊まることもあり、その時に気力だけでは無理だなと感じてしまいました。休み休みしなければならぬと、先日ちょっとショックを受けました。

ずっと施設からグループホームへ移行するという仕事をやってきて、この仕事を自分としては気になりますし、愛着がある。携われることにありがたさは感じています。

【松崎】 では視点を改めて、社会福祉法人朔風の事業の紹介、グループホームのことなど教えてください。

【岩松】 朔風は、生活介護事業所（3か所）・就労継続支援B型事業所（5か所）・就労支援事業所（2か所）・グループホーム（12か所）・相談支援事業所（1か所）・ショートステイ（2か所）を運営しています。もともとが無認可の小規模作業所を運営していましたが、法内事業へ順次移行し現在の形となっています。

その中で、私は、グループホーム（名称：そら 定員19名の3ユニット）と就労継続支援B型事業所（名称：ひいらぎ 定員20名・現員22名）の管理者を務めています。高齢になるにつれ重度化重症化していく状況を踏まえ、2012年（平成24年）にできたグループホームが「そら」です。

「そら」はその時に新しく出来た事業所でしたが、「ひいらぎ」は別の場所で小規模作業所として運営していましたが、建物が古くなったこともあり、「そら」を新設する時に同建物で新しくスタートすることになりました。ニーズもあり「そら」の定員はすぐに埋まりました。「ひいらぎ」は就労継続支援B型ではありますが、生産性よりも居場所としての機能が強く、和気あいあいとした事業所です。就労経験あった人もいますが、二度と働きたくないという人もいます。

【松崎】 そのような和気あいあいとした就労継続支援B型事業所と言うことですが、どんな作業をされているのでしょうか。またコロナ禍で収益に問題があったりされましたか？

【岩松】 施設内で働くことは限られているので、コロナ禍前は施設外就労が大きな収入源でした。大きな病院のベットメイクやコンビニの陳列・清掃もしていました。施設内・施設外就労が半分半分でしたが、コロナ禍ではそのあたりが難しくなって。収入は減りましたが、貯蓄していた分などで工賃に大きな影響はありませんでした。

【松崎】 グループホームと就労継続支援B型事業所を同じ建物で運営されているんですね。「そら」は現員19名という大きなグループホームですが、日中活動支援型ではなく、3ユニットとして運営されているんですね。

【岩松】 はいそうです。人数が多いこともあり、始めは周りからは胡散臭い建物だとも言われていました。重度化対応のグループホームということで、職

員人数をとるために体制上この形を取りました。3ユニットでの運営ですが、結局は完全独立としては認められず、減算の対象になっています。

「そら」は介護や医療ケアが必要になっても、ご本人や保護者の方が望めば、関係機関と連携しながら最後までお手伝いをさせていただきたいと考えています。医療的ケア対応のグループホームで、現在は内2名の方が医療的ケアが必要な方です。近くの総合病院と連携をとって、訪問看護やりハビリ、栄養指導などのバックアップをいただいています。

【松崎】 総合病院のバックアップがあるとは、大変うらやましい話です。地域医療との連携はどこも課題だと思いますが、先んじて「そら」さんは実施されているとのこと、素晴らしいです。

【岩松】 いえ、今はそのような形になりましたが、最初の1年はどこにも断られて。声をかけていた今の病院のソーシャルワーカーさんが記憶にとどめてくださって、2年目からそのような形になりました。すぐに容体が悪くなる方もいらっしゃるので、この連携は非常に助かっています。ただ、事業所としての限界はありますね。看護師は非常勤ですし、体調によっては入院になります。入院の時は病院と連携して、入院先に支援者を入れたりもしています。

といっても採算で考えた時は、やはり難しいです。始めの頃はとんでもない額の赤字を出してしまいました。現状もそれなりの赤字を出しています。10年ちょっとで終わりますが、建物の返済もありますので、加算の取り方などで工夫が必要です。返済が終われば、何とかなるんですが。

事業所設立当初に、上司からは「親亡き後も安心して暮らせる場」を趣旨として、私の思うままに事業所を作り上げて欲しいと言われ、実践してきました。今でも事業を好きにやっついていい、経営のことは考えなくても良いと言われていますが、それでも考えますよね。法人でこの事業を支えてもらっているわけですし。

【松崎】 そうですか。支援が必要なところに必要なだけ行き渡るといいのですが。また採算の問題も大きな課題ですね。経営のことを考えなくていい、と言うのは魅力的な言葉です。羨ましいほどの法人の度量です。

少し話が戻りますが、若松さんはアルバイトから今の仕事にたどり着かれたとのことですが、その頃の思いや何か引っかかるものがあって、この世界に長く携われているのでしょうか。

【岩松】 特に何をということはないのですが、その当時の職員さんが生き生きと働いていたので、こういう風に働きたいなとシンプルに感じました。利用者の方との関わりの中では、こんな私にも皆さん頼ってくれて、自分でも役に立つんだと感じたのを覚えています。小さなこと、何か壊れたとかはずれたとかでも聞いてきてくれて。他の世界ではこのような気持ちにはならなかったですね。自分の存在価値みたいなものでしょうか。

ただ、入職して4年間くらいは、上司から怒られる毎日で、心が折れてしまい退職を決意した時がありました。就職先を見つけ（地元の公務員）、後は辞表を提出するだけの状態の中、新たな上司が赴任してきました。その上司は、職員の主体性を尊重してくれ、したいと思う事の根拠をきちんと伝えれば、何でも取り組んで良いという姿勢で、はじめて仕事の楽しさを感じることができ、もう少し続けてみようと思い退職を撤回しました。

その上司からは、「人の人生はいかに良い出会いがあるかによって、長い人生の中で大きなプラス要素になると思います。私（上司）とあなた（私）のこれからの時間がそうありたいと思っています。」というようなことを言われ、私も利用者の方とそうありたいと感じ、それからは余計なことを考えず、自分としては仕事一直線できたつもりです。

【松崎】 やめようと思ったこともあったんですね。良く踏ん張りましたね。もういいやとなる人も多い中、素晴らしいです。さて、多くのことを経験されてきた若松さんですが、現在の問題意識、これからの課題、どうお考えですか。また福祉現場では人手不足が深刻になっていますが、若松さんの思いはどのように伝えていますか。

【岩松】 そんな凄いことではなかったんです。大学も中退ですし、絶対やめられないと思っていましたから。最初の4年間は上手くできずに当時はストレスからか高熱や入院もありました。逃げることはできない、簡単に辞められずにいたということです。もちろん同僚にも恵まれましたね。

「そら」は入居者19名の中で、支援度がかかなり高いかたは少数ではあるものの、今後増えていくことは容易に想像できます。そのような状況になった時に、職員集団としてそれに対応できる体力、知識と技術、やる気と心の余裕があるのか、私も後7年で定年なので、それまでの間に託すリーダーと体力が備わった職員集団を築かなければならない。先人たちが築き上げたものを繋いでいきたいと思っています

ですがこの仕事は365日気が休まることがない。付いてきてくれる人に後を続けてやってほしいとは思っていますが、バーンアウトする人もいるので、そこら辺をどうしていったら良いかとも思っています。もちろん支えてくれるスタッフもいます。職員とは日々よく話しているつもりではありますが、思いだけで仕事をするわけにもいかないのいろいろなと考えますね。

職員の出入りも最初の4年間は多く、初年度は4月スタートして8月で半分は辞めました。私自身も若かったこともあり、職員に求めるものが大きかったと思います。気になることを一から十まで言い過ぎていました。少しずつ進めるうちに皆、趣旨を理解してくれて、5年目から定着するようになりました。

今はありがたいことに辞める人がいなくなり、逆に「そら」を異動したくないといってくれるようになりました。職員はこんな一生懸命やって

いるのに結果が出ないと苦悩していますが、見返りを求めたり、頑張ったから成果が出るというかということそうではないですね。

我々が出来ることは利用者に寄り添っていくことだと。結果は考えなくても良いと伝えていきます。どんなにやさしく接しても夜中暴れる方もいる。苦悩は付きまとうわけですが、私自身、寄り添うことの大切さをやっとこの年になって感じようになりました。その辺をどう職員たちに伝えるか。今はとにかく一緒に悩みを共有して、何かあった時は一緒に泊まることもしながら共に考えています。

【松崎】 職員の方たちとしっかりコミュニケーションを取りながら、この先のリーダーを育てあげている様子がよく伝わりました。

【岩松】 いえ、そんなにしっかりと取り組んでいるわけではないんですが。

私の言葉ではないのですが阿部 志郎 氏の「福祉の哲学」に「マイノリティが尊重される社会が社会福祉にほかならない。福祉は、マイノリティを重んずるところから始まる。」という言葉があるんです。

私自身、マイノリティがマイノリティを造ってはいけないと思っています。この仕事に従事している専門職の中には、「無理」や「難しい」や「忙しいから手が回らない」や、更に最悪は「他の事業所へ移ったほうが本人にとって幸せではないのか」などといったことを耳にします。あたかも職員自身の力量不足を正当化するような文言を並べ、マイノリティを守らなければならない立場の人が、ご本人や保護者の意向なしに排除してはいけないのではないかと思っています。

だからと言って、すべて受け入れることも出来ないことも管理者として経験はしています。触法の方を受け入れたことがあって。その方は他の利用者が怯えたり、職員が怖がるような方でした。その時初めて、私がない時に何かあったらと思い、他の事業所へ移行する運びとなりました。なので安易に諦めずになんて言ったらいけない、とも思っています。その当時は職員をかばう考え方をしましたが、今でもそれが正しいのかわからないです。

【松崎】 それは皆さんが抱えている障害福祉現場での深刻な課題です。自分たちのキャパの限界はどこか。制度が進んでも、結局手のかかる人を押し付け合って、最後のところで虐待が起きてもそれは知らないと。それで福祉なのか。しかし職員の対応できる限界もあり、全て現場の職員のせいにもおかしい。そんな悩みを抱えていると思います。私達の協議会は小さな事業所が多いので、常に身近で起きているはずで。皆さんと協議していきたいテーマですね。

【岩松】 はい。設立当初、「そら」から「ひいらぎ」に通っていた人もいらっしやって。その方は高次脳機能障害の方で、新しい記憶が構築できない方でした。なので通所事業所が変わったらかわいそうという思いで、直接「ひ

いらぎ」に通えないとは言えなかったんです。一旦外に出てから出勤する形を取っていましたが、職住分離の原則で別の通所事業所に通所することとしました。引き続き居住は「そら」を利用していますが、それから5年、今でもその通所事業所へは行きたくない、「ひいらぎ」に行くと言っています。切ないですね。悩むところです。本人の想いと制度との乖離が感じられます。

【松崎】 それでは最後となりますが、若松さんからこれだけは皆さんに伝えておきたい思いがあったらお話しください。

【岩松】 伝えたいことはほとんどお話しさせていただきましたが最後にひとつ。



【「ひいらぎ」での作業の様子】

「ひいらぎ」は就労支援B型の事業所ですが、働くということの意味をよく考えさせられます。定年の問題もありますが、本当に皆働きたいのかと。もちろん働きたい人もいらっしゃいますが、周りの流れがそうだからそうしている、それしか知らないからそうしている人も多いと思います。

就労継続支援B型や生活介護という括りだけではなく、次のステージも必要なのではないかと。いつまで働くのか、その次のステージをどのように作らなければならないのかと思っています。制度や規定なども含め、利用される方がいかに暮らし易くなるかこれからも考えていきたいと思っています。

【松崎】 若松さん、ありがとうございました。

ひたむきに利用者支援に向き合われているそんな若松さんの志を伺うことが出来ました。

誰もが住みなれた地域の中で自分らしく安心して暮らし、社会参加をする。そんな仕組みづくりと、これからの福祉のあり方について、北の街から発信していただきました。その想いを込めた名前が法人名の「朔風」なんです。その名前にふさわしい若松さんの熱い気持ちが、北の大地から届きました。

本日は、ありがとうございました。

（全国手をつなぐ事業所協議会 理事長 松崎 伸一）

# 全国の事業所から

まんさく園  
〔社会福祉法人 麦の会〕  
（熊本県 八代市）



【事業所の外観】

「まんさく園」は、九州・熊本県八代市にある、社会福祉法人「麦の会」が運営する福祉作業所です。

1990年（平成2年）4月、「まんさく園」は設立されました。設立したのは、障害児を持つ親たちです。この時代、障害のある人たちの就職先や、社会活動の場は、地方にはほとんどありませんでした。そこで「無ければ自分たちで創ろう」と、親やボランティアが力を合わせ、無認可の通所授産施設として開園。当初の園舎は、築80年以上のオンボロ木造家屋を改修したものです。そこに通う利用者は、養護学校（現・特別支援学校）高等部の卒業生3人でした。

利用者の増加から、2003年（平成15年）には社会福祉法人を設立。福祉制度の変化を受け、2007年（平成19年）に園舎を建て替え、多機能型事業所に改編しました。その後、グループホーム開設などを経て、現在に至ります。2023年（令和5年）3月時点の利用者は33名で、就労継続支援B型（定員30名）と生活介護（同6名）、そしてグループホーム（同12名）の3事業を行なっています。



「まんさく園」の名称は、マンサクという樹木に由来します。早春に小さな花をたくさん咲かせることから、マンサクは「まず咲く」が語源とも言われます。障害のある人たちが地域で暮らしていく拠点を、まずこの地に花開かせよう・・・そんな思いが込められているのです。



【さをり織の作業の様子】



【製菓部門もあります】



【協力して織り上げた布】

授産活動は、大きく2つあります。ひとつは、設立当初から取り組んでいる“さをり織”です。小型のハタを使い、利用者の自由な手織りによってできた一点物の織布を、バッグや服などに仕立てて販売しています。温かみのある素朴な風合いが人気です。もうひとつは、店舗運営を伴う飲食事業。カレーなどの料理や、クッキーなどの焼菓子を作り、園舎に併設するカフェ「クミン」で提供しています。レトルトカレーを委託販売に出したり、キッチンカーでイベント出店することもあります。



【体を動かすレクリエーション活動も取り入れています】

私たちは、「まんさく園」という施設の運営を“地域づくり”と捉えています。施設運営を通して、弱者であっても住み続けることができる地域、人に優しい地域の実現を目指し、今も努力と試行錯誤を重ねています。

（社会福祉法人 麦の会 まんさく園 管理者 永野 圭祐）

# 知的障がい児者・自閉症児者の 生サポは 家族の安心を支えます

- 日常生活に関する相談支援
- 就労に関する相談支援
- 権利擁護に関する相談支援

の3事業を実施しています。

当会にご入会いただくと、知的障がい児者、自閉症児者のための病気やケガの総合補償制度をご利用いただけます。

## 主な補償内容

病気やケガで入院したとき  
入院給付金

賠償責任を負ったとき  
個人賠償責任保険金

ケガをしたとき  
死亡・後遺障害・入院・通院・手術／各保険金  
(地震・噴火・津波によるケガも対象)

虐待・逮捕・勾留に対応するとき  
弁護士費用等補償  
※プランによって補償します

病気で死亡したとき  
疾病葬祭費用保険金  
※プランによって補償します

就労中に他人にケガをさせたり  
物を壊してしまったとき  
職業従事中事故対応費用補償  
※プランによって補償します

※上記は概要ですので詳細は下記までお問い合わせください。

## ● 生活サポート総合補償制度の主な特長 ●

- ▶ 入院給付金は既往症の病気、てんかんも補償。
- ▶ 全国の団体を通じてのご加入のため、多数割引が適用され、個人加入の場合に比べて保険料が割安です。
- ▶ 取扱代理店は、知的障がい児者や自閉症児者への保険の販売において、30年以上の実績があります。

生活サポート総合補償制度は…

全国で約149,000人のみなさまにご利用いただいている補償制度です。



AIG損保の普通傷害保険

## 生活サポート総合補償制度

特定障害者福祉団体傷害保険特約、弁護士費用等補償特約、  
職業従事中事故対応費用補償特約、地震・噴火・津波危険補償特約セット

### 保険のお問合せはこちら

■ 担当代理店・扱者  
株式会社 ジェイアイシー  
〒160-0023 東京都新宿区西新宿3-2-11  
新宿三井ビル2号館2F  
TEL: 03-5321-3373 FAX: 03-5321-4774  
受付時間: 午前9時～午後5時  
(土・日・祝日・年末年始を除く)

■ 引受保険会社  
AIG損害保険株式会社  
<https://www.aig.co.jp/sonpo>  
東京第二プロチャネル営業部  
〒163-0814 東京都新宿区西新宿2-4-1 新宿NSビル14階  
TEL: 03-6894-9110  
受付時間: 午前9時～午後5時(土・日・祝日・年末年始を除く)

### ご入会のお問合せはこちら

一般社団法人 全国知的障害児者生活サポート協会  
連絡先はTEL又はホームページにてご確認ください。  
TEL: 03-5577-6351 <http://www.zensapo.jp>  
加入窓口は全国の全国知的障害児者生活サポート協会傘下の  
各都道府県団体の事務局となります。

2021年12月現在の内容です。(D-005640 2023-03)

病気やケガが絶えない…  
成人病や生活習慣病に備えたい…



他人の物を壊してしまった…



このようなお困り事に  
心当たりがある方に…



虐待・雇用現場での差別など  
人に相談しにくい悩みがある…

障がいのある方とご家族へ



ぜんちの

あんしん保険

少額短期健康総合保険(株式会社)2019年創設

- ・最高日額1万円
- ・個人賠償責任補償
- ・弁護士費用補償
- ・安心サポート

知的障がい・  
発達障がい、ダウン症、  
てんかんの有る方、  
ご家族に

弁護士が  
全面的に  
サポート

特別支援教育を必要とされている方へ



ぜんちの

こども傷害保険

権利保護賠償付傷害保険 2019年創設

- ・入院・通院を日額保障
- ・個人賠償責任補償
- ・トラブルに巻き込まれた際、  
弁護士がサポート



※ご契約にあたっては必ず「ご契約に際しての重要事項」「約款」東京海上日動の「重要事項説明書」をよくお読みください。  
ご不明な点等がある場合には、ぜんち共済株式会社までお問い合わせください。

詳しい資料のご請求・お問合せはこちら

〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-5 九段北325ビル4階

0120-322-150

平日9時～17時/土日・祝日・年末年始を除く

URL: <http://www.z-kyosai.com/>



ぜんち共済株式会社

関東財務局長(少額短期保険)第14号

【2020年1月作成 19-TC06633】

## 編集後記

北海道の桜の開花は5月上旬ともう少し先ですが、全国的には暖かくなり桜のシーズンが近づいてきましたね。コロナ禍で一変した花見や卒業式、入学式などの風景も今年は少し変わりそうです。

政府は1月10日に新型コロナウイルス対策のマスク着用について、3月13日から新たな指針を適用し、屋内外を問わず個人の判断に委ねる方針を決め、さらに5月8日からは新型コロナウイルス感染症を2類相当から5類に変更することも発表されました。

ようやくここまで来たかと感慨深いものもありますが、手放しで喜ぶわけにもいきません。事業所には高齢な方や基礎疾患のある方が在籍しているケースも少なくありません。これまでは当然のようにマスク着用の協力要請をしてきましたが、事業所としての方針も、外したい方と着けていたい方の双方の意向をどこまで汲み、どの時点で切り替えていくかが問われます。願うのは、このままコロナウイルスがフェードアウトしていくことです。

5類移行後は、事業所へのかかりまし経費の補助や、特例措置などの支援策についてもどのようになるか見通しについて気になります。5月8日を境に全てなくなるということは無いでしょうが、現場の実態に合った段階的な変更となるようにしていかなければなりませんね。

（北海道ブロック 門内 勇治）

全国手をつなぐ事業所協議会ニュース  
『ほっとすぺ～す』2023年3月号  
(通巻149号)  
2023年3月15日発行

【編集・発行】  
全国手をつなぐ事業所協議会  
岩手県盛岡市下飯岡15地割77-3  
TEL 019(613)7200 定価100円

コヒー用紙 定期配送サービス  
※ご注文の数量に、お問い合わせください。

もっと便利に！  
もっとたくさん！

ウチダシステムズの通販をご利用頂ければ、  
事務用品・衛生用品などが  
全国手をつなぐ育成会連合会  
事業所協議会様向けの特別価格で  
お安くご提供できます！

### ポイント①

760万以上の商品を  
「事業所協議会の皆  
様だけの特別価格」  
でご提供します！

### ポイント②

最短翌日配送のス  
ピードで欲しいものが  
直ぐに届く！  
※一部、対象外の地域有

### ポイント③

請求書を科目や事  
業毎に分けることが  
出来るので経理業務  
が楽に！



ご相談は下記までお問合せ下さい。  
株式会社ウチダシステムズ 福祉施設営業部  
TEL : 03-3537-0888